

親鸞仏教センター通信

2004.
March

第9号

2004年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

速さを見直すということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

いわゆる文明の進歩ということのなかに、より「速い」ことに価値を求める方向があつて、科学技術によるスピードを競い合うということがある。例えば、飛行機がプロペラ機からジェット機になり、音速を超えるような旅客機がもてはやされる。客車が新幹線に代表されるような、高速の列車になっていく。「こだま」が「ひかり」になり、さらに「のぞみ」になって、飛行機と旅客の奪い合いをしている。

そして、「速さ」が仕事の速さとなり、効率化となり、緩やかさは切り落とされていく。日程も切り詰められ、すべてのものごとは、短時間で処理されるようになる。それが文明の価値観であり、そのために機械化やIT技術が世界を覆っていくというわけである。

ところが最近、「速さ」について見直そうという運動が起こってきている。“Slow is Beautiful”（ゆっくりするのは、うつくしい）という書物が、ベストセラーになっている。これは、人間の生活がそろそろ「速さ」に付いていけなくなったということだけではないと思う。

確かに、企業社会が合理的に利益を追求するには、短時間で能率良く安上がりの労働を確保するほうが評価されるのであろう。しかし、そこに生きている人間はどうなるのか。人間は生き物として、生命のリズムがあるし、生きていることに悩んだり喜んだりする存在である。そして、自分が生きていることの意味を求めるものでもある。機械やロボットのように、速さや合理化に付いていけないだけではなく、疲れたり飽きたり嫌気がさしたりするのである。“ちょっと待てよ”と立ち止まるものなのである。

なによりも、「速さ」によって人生に豊かな時間が恵まれるのかというと、そうではなく、ますます自分の時間がなくなるのである。「ゆとり」などというものは、効率第一の発想には、不必要なものなのである。だから「速さ」の見直しということは、「文明」によって切り捨てられていく「人間存在そのもの」からの異議申し立てなのではないか。

大量消費や使い捨ての生活は、単に生活用品を無駄に捨てるということに止まらず、人間存在の、いのちとしての「ゆとり」や「豊かさ」をも削り取り、無視していくことになっていく。「遊び」が人生に与えてくる「ゆとり」さえ、規格品の枠にはめて、商品のようにしか手に入らなくなってしまっている。そういう「文明」からこぼれ落ちている人生の尊さを、自分たち自身で取り戻したいという思いの立ち上がってきたのが、「ゆっくりいこう」という呼びかけなのではないか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 心の闇にはたらきつつける浄土

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第20回から第22回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第20回では曇鸞の『浄土論註』の初めに述べられている、求道における五つの困難について、第22回では天親菩薩の『浄土論』の眷属功德について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた（なお、第21回のシンポジウムについては、12頁を参照ください）。ここでは、先に行われた第16回の問題提起からその一部を紹介する。

（越部良一）

■ 人間存在の闇

人間が普通に生きている意識というものを、仏陀は、迷いの情、妄情というふうに言うわけですが、われわれは迷っているとは思わない。正しく考え、正しく認識していると思って生きているけれど、そのあり方全体の根に本当のことを知らないという盲点がある。それを「無明^{みょうみょう}」、明るみが無いと言います。

私たちは理性をもっていて知恵があり、合理的にものを処理して賢いから人間存在は万物の霊長である、などと言って、あらゆる存在のなかで一番大した存在だと、こう思い込まされていますけれど、仏陀からすれば、人間存在ほど哀れな存在はない。つまり、与えられた存在自身に、人間以外の存在は、皆、自足している。生きていること自身を疑問に思ったり、生きていることに不平不満を抱いて苦しんだりということは、人間のみである。状況に痛んだり、苦しんだりすることは生命体には皆あることで

しょうが、なぜ自分が苦しむのかと、苦しい状態を疑問にして、もう一回自分を痛めつけるといのは人間だけです。だから、人間ほど哀れな存在はない。

どんなに賢く生きていると思う人間であっても、自分の存在に対する深い不満足、こんな人生ではないはずなのだがとか、何でこんなになってしまったのだろうとか、何か訳のわからないものを抱えている。それを「愚痴^{ぐち}」と言う。無明という意味での愚痴。つまり、根本的愚かさですね。世間的にはどれだけ賢くとも、人間は根元的に愚かであって、そこから脱出できない。そういう意味の「痴」です。世間で成功するか、しないかという問題ではない。仏教から見た人間の愚かさです。

状況に流されて自分を取り戻せない。私たちは、自分では自覚していなくとも、その底に、そうした闇が本当は晴れたらいいと、どれだけ願っているかわかりません。闇から脱出したいという深い願いがある。闇だと言われたら闇だなどと思い、流転だと言われたらそうだなと思うわけです。だから、そういう闇を破りたい、という如来の願いが人間に響くということは、人間それぞれの根源に、どこかで本当はこの闇が破られなければならないという課題を背負っているということなのでしょう。

■ 浄土の光

宗教というものには、光という概念がつきものですが、それは、何か宗教の語りかける言葉に、人間の心を根本から明るくするはたらきがあるからでしょう。人間はそういう言葉に触れ

ないと暗い。つまり、何かそこに精神的な落ち込みであるとか、閉鎖性だとか、自己嫌悪だとか、何かそういう自分で自分を縛る感じるところがある。

そういう心の闇をもつ人間を、本当に平等に光に摂め取りたいという願いをかたちにしたものが浄土である。それで浄土が「光明功德」、光として説かれるのです。それは、衆生の闇を晴らしたい、十方の闇の世界をすべて明るくしたいという仏の願いがかたちをとったものですから、浄土はどこかにあるというよりも、闇のあるところに浄土があるのです。すなわち、自覚すれば、闇のあるところには光がはたらいているのです。

この光としての浄土を親鸞聖人は、「真仏土」と仰せられる。真の仏土、真の仏である阿彌陀如来は、無量光、無辺光、無碍光と、光の名で言われます。不可思議光という言い方もします。人間の考えを超えていて、考えてわかる光ではない。けれども、出遇ってみると本当にかたじけなく光である。心の闇をどこまでも晴らし続けてくださる。闇が深ければ深いだけ、光の明るさが明るい。だからわれわれの闇の深さは、自分でわかる以上に深い。それだけ阿彌陀の光の深さが深い。そこに歓びが尽きることがないという味わいが、親鸞聖人の「愚禿悲歎述懐和讃」のなかには感じられます。悲しいけれどもかたじけなく。こういうのが、浄土の光がわれわれに呼びかけてくる意味だろうと思うのです。

■ あきらめない心

私は、こうやって、いただいた仏法を何とか少しでもわかるように話そうなどと、分別してやっておりますけれども、本当はどう逆立ちしてみても、なかなかわかる話ではないのですね。でも、わからなくても、何か自分の根源にささやいて来て、どこかそうかなというものがあればよい。つまり、針の穴のようなものでよいのです。土手に針の穴さえあれば、あとは放っておいても水が流れる。その針の穴が難し

い。なかなか頑固な岸壁でね。けれど、あきらめることはない。法蔵願心はあきらめることがない。われわれの闇は晴れることがない。だからこそ、晴らさずば止まんと、永劫に修行すると法蔵菩薩は誓っているわけです。だからあきらめることはない。われわれの時間は短いけれども、法蔵菩薩の時間は兆載永劫ですから。その永劫の時間のなかに、われわれの一念一念が、少しずつ目が覚めるように導かれていくのではないかと思うのです。

そういうふうにゆっくりと仏教を聞いていくことです。現代のこの忙しい時代に、何をゆっくりやっているとされるかもしれませんが、そういうものなのです。忙しく生きて、たかが知れている。短い人生のなかに何を喜びとするのか。短くてもよかったと。本当によかったと言えるものを見出すことが大事なのでしょう。

迷い多きこの人生だけれども、私は、親鸞聖人という方が本当に力を尽くして呼びかけてくださった、「愚かな人間だけれど、愚かなままで飲べる道がある」ということが、本当にありがたいと思っております。皆さま方も、難しい時代ではあるけれど、ご自分のそれぞれの人生に、何がしかそういう光のあることに触れていただけたらと、願って止まないことであります。

(文責：親鸞仏教センター)

※本講座（第13回～17回）の詳細は、『現代と親鸞』第5号（2004年6月1日）に掲載の予定です。既刊号購読ご希望の方も、親鸞仏教センターまでお申し込みください。

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2004年3月15日(月)午後6時30分～9時
4月 休講します

5月 7日(金)午後6時30分～9時
場所：有楽町・東京国際フォーラムG407
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

現代と親鸞の研究会・第10回

近代と老人介護

理学療法士 三好春樹



三好春樹氏

2003年7月23日、東京ガーデンパレス（文京区）において、理学療法士の三好春樹氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

近代的自我から解放されて、生き物に還っていくのが老いや痴呆であり、そこに深い生き方を見出されながら、介護に関わり続けている三好氏に「老人介護と子育て」をテーマに語っていただいた。その一部を紹介する。（本多雅人）

■ 異文化としての老い

— 近代的人間観を超える —

進歩・発展をよしとする近代的人間観が、いま大変な矛盾をきたしています。介護の現場にいて思うことは、近代的人間観というようなものを超えないと、実際に介護はできないという感じがします。

^{おうそう} 往相ばかりで^{げんそう} 還相がないというのが近代的人間観といっていいでしょう。往相として一方的に^い 往くだけでは、老いというものを意味づけられないと思います。たとえ意味づけるとしても、その流れに流されてしまうわけです。仮に、自己実現の段階までいった人でも、歳を取ると、本能の方向、つまり、より下の低次の階層に^{かえ} 還らざるを得ないでしょう。必ず下降する還相があるのに、あたかも還相がないかのように、世のなかや国家や会社というのは進歩・発展していくのだという考え方が、実は、老人問題をつくっていると言ってもいいと思うので

す。

現代は、要するに「異文化としての老い」というものが見えない社会になっています。いきっぱなしの方向のなかで、老人をこちら側から見た救済の対象、介護の対象として見るのではなくて、還相を一生懸命に生きている主体であるという捉え方をしなければいけないと思います。脳細胞が萎縮して、わけがわからない状態だから介護してあげなければいけないというように、単なる痴呆性老人という対象として捉えるのではなくて、とても困難だけれども、老いを一生懸命生きようとしているからこそ、あんなに混乱して問題行動が起きているというふうな捉え方が、還相の思想でできるわけです。

あるいは、痴呆性老人というのは、狭い近代的自我から解放されていく人たちであるという捉え方ができないものだろうかとも思います。というのは、近代的自我をもった者だけが人間であるという狭い人間観から痴呆性老人を見て、介護の対象としていることがあるからです。

例えば昨年、厚生労働省は、特別養護老人ホーム全室個室化を打ち出して、朝日新聞や毎日新聞などのマスコミも社説で賛成しました。現場に来ればよくわかりますが、痴呆性老人は個室を喜んでいないのです。近代的自我がある人は、個室がいいだろうと思いますが、痴呆のように近代的自我から離れて、いわば生き物へ回帰していくという人にとっては、個室が独房みたいに感じられるのです。

日本の社会は、老いや痴呆を内在化するのに少し失敗して、結局、自分たちの考えている非

常に狭い人間観を老人に押しつけるという誤りを、厚生労働省を先頭に、近代的市民といわれる人たちが犯しているような気がします。

■最後の母としての介護職

—子育てとの共通点—

痴呆性老人の問題行動は、格好いいとは思わないけれど、それが存在証明だと思ったほうがいいと思います。これは子育てとまったく共通していることで、痴呆性老人を肯定的に受け止める「母」がいればよいと思うのです。そういう意味で、介護職は最後の母ですね。その人を変えようとか、暴力行為をなくそうとか、問題行動をなくそうというのではなくて、これを受け止めるということをやればよいということなのです。問題行動などを変えようとか、説教しようとかたちで関わった専門家は、薬を飲ませたりもしましたが、まったく効果が上がりませんでした。ところが、逆にそういう手段を知らなくて、肯定的に受け止めるということを行なったのは、実はまったくの素人の集団です。その人たちが痴呆の老人を落ち着かせたのです。

では、老人がどうしてだめになるかということですが、身体の障害が理由になることはほとんどありません。そういう人が寝たきりになるのは、その麻痺した体で生きていこうという気持ちが無くなったからなのです。主体がまず崩壊し、それから体がだめになっていくのです。私は、このことを「関係障害」という言い方をしています。老いた自分とどう付き合っているかわからない。障害をもった自分が自分だという気がしない。この自分を生きるということができなくなっているということなのです。

現代医療は、歩けない人を歩くようにするという力をもっています。しかし医療では、歩けるのに歩かないという人をどうするかという方法については、まったく習っていないのです。だから、いまのような例では「本人の意欲がない」というひとでお終いです。そこからが介護の仕事ということになるわけです。だから麻

痺した手足を治す方法ではなくて、この麻痺した手足でどう生きていくのかということが、介護という仕事だと思います。一人ひとりの障害と老化に見合った生活づくりをどうするかという、文字どおりプリコラージュ（手作りの方法）が介護という仕事です。

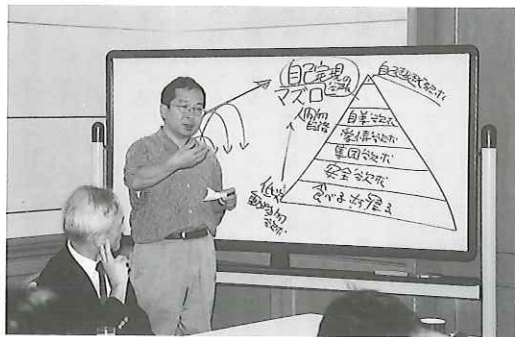
育児書を読みながら育児をやっているお母さんたちが、言葉が通じない赤ちゃんに対して、どうしていいかわからない。本に書いてあることが通用しない。これは、育児力がなくなったのではなくて、育児関係がとれなくなったという問題だと思います。それとまったく同じで、介護の問題も、介護力が足りないのではなくて、介護関係がとれないということが問題だという気がします。そこがつながっているように思います。子どもをめぐる問題は、老人をめぐる問題とどこかで通底しているように思います。

（文責：親鸞仏教センター）

※三好春樹氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第5号（2004年6月1日号）に掲載予定です。

三好 春樹（みよし はるき）理学療法士、「生活とリハビリ研究所」所長

1950年、広島県生まれ。特別養護老人ホームに勤務後、九州リハビリテーション大学を卒業し、再び特別養護老人ホームで理学療法士として勤務される。85年より「生活とリハビリ研究所」を主宰し、情報誌『プリコラージュ』を発行。また、全国で「生活リハビリ講座」を開催している。著書に『元気がでる介護術』（岩波書店）、『老人介護常識の誤り』（新潮社）、『男と女の老いかた講座』（ビジネス社）、『プリコラージュとしての介護』（雲母書房）。共著に『「老い」の現在進行形』（吉本隆明、春秋社）、『老人介護とエロス』（芹沢俊介、雲母書房）などがある。また、『アンジャリ』（親鸞仏教センター）創刊号に「老人介護と子育て」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

に、無碍の一道なりと云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

現代語訳

念仏は、「無碍の一道」である。その理由は、信心の生活者に対しては、天の神・地の神も敬ってひれ伏し、また、人間の生活を脅かすものや、人間の理性を誘惑するものなどにも引きずられることはないからである。

自分のおかしてきた罪の結果も、自分を脅迫するものとして感ずることはない。また、人間のつくるどのような善も、如来の大悲のはたらきには及ぶものではない。だから、念仏は「無碍の一道」なのである。

語 註

①【無碍】無碍は有碍^{うがい}に対する言葉。さわりのないこと。

②【魔界】人間に誘惑や恐怖を感じさせて、墮落や諸々の災厄を引き起こすと思われるもの。例えば、死魔・病魔・煩惱魔等。

③【外道】仏道に外れた思想。ここでは、本願力によらないで、救済されると考えるすべての思想。

④【業報】一般的には、過去の善悪の行為が現在の報いをもたらすという意味である。つまり、経験の蓄積が人間を形成していき、善悪の行為の結果が現在の自己の状況となっているという、存在の責任感を表す言葉。ここでは、この責任感の重圧に苦しめられる人間存在に対して、如来のはたらきにまかせれば解放されるということを述べている。

はなれたるゆえに、行者のために
は非行非善なりと云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

現代語訳

南無阿彌陀仏は、信心の生活者にとって、「行でもなく善でもない」。それは、自力の思いで称えるものではないから「行ではない」というのである。

人間の意志でつくることのできる善でもないから、「善ではない」というのである。

全面的に本願のはたらきであって、人間の思いを超えているから、信心の生活者にとって念仏は「行でもなく善でもない」のである。

語 註

①【非行非善】親鸞は、念仏を如来の本願の行(大行)であり善である、とあきらかにされている(『教行信証』『行巻』)。ここでは、念仏が人間の目的意識でつくる行為や善行ではないことを示して「非行非善」といわれる。

②【自力】親鸞は、自力について次のように述べている。「自力^{じりき}というは、わがみをたのみ、わがところをたのみ、わがちからをばげみ、わがさまざまの善根^{ぜんこん}をたのみひとなり」(『一念多念文意』)とある。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

私の「冊」

(田村晃徳)

『パンセ』

パスカル(中公文庫)

私は再読をほとんどしない。そんな私が幾度となく読んだ数少ない本の一つが『パンセ』である。

「人間は考える葦である」。「パンセ」はこの言葉とともに有名だ。だが、その他にも文字通り珠玉の言葉は数多い。「無限のなかにおいて、人間とはいったい何なのである」。「理性の最後の歩みは、理性を超えるものが無限にあるということを超えることにある」。「パンセ」が私を惹きつけるのは、そこに真摯に生きる人間の姿が描かれているからだ。

無限と人間との関係や理性の問題点の指摘は、私に清沢満之を想起させる。共に希代の秀才でありながら、宗教に出会いエビクテトスに強い関心を抱く。そして病のためにほぼ同年齢で生涯を閉じている。病に冒されつつも、信仰に生きたが故に二人の宗教観は胸をうつのであろう。その意味でパスカルの宗教観は、重要であり、明治の早いうちから日本にも紹介されていた。だが清沢は、パスカルについてほとんど言及していない。これは私にとって一つの謎である。



『聖典』の試訳（現代語化）

「トランスレーター（翻訳者）はトレーター（反逆者）である」という諺が、西欧にはあるそうだ。「現代語訳」という作業には、つねにトレーターの罪悪感がつきまとう。本来、翻訳することの不可能な言葉を、現代語に変形させるからだ。だから「親鸞がそんなことを語ったのか」と詰め寄られれば、「そう語られたという証拠はない」と答えるをえない。

しかし、それでは逆に「親鸞がそのように語らなかったという証拠はあるのか？」と問えば、それには誰も答えることができない。あるいは、現代に親鸞が生きていれば、そのように表現しなかったという保証もない。だとすれば、ごく限られた現代の「個」の実感から「普遍」へと共鳴する言葉を模索することも無意味ではないと思われる。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第七条〉――

原文

念仏者は、無碍の^①一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も^{てんじんじぎ}敬伏し、魔界外道も^{まかいげどう}障碍^{しょうがい}することなし。罪惡も業報^④を感じることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえ

『歎異抄』試訳〈第八条〉――

原文

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。

ひとえに他力にして、自力を^②

親鸞仏教センターの動き

(2003・12) (2004・2)

■2003年

12・1 情報誌『聖典』第6号、研究誌『現代と親鸞』第4号、機関紙『親鸞仏教センター通信』第8号を発行。

12・5 現代と親鸞の研究会⑦「現代の世界の問題をどう見るか」ジャーナリスト・ニユースキャスター・筑紫哲也氏（千代田区・ホテルニューオータニ）

12・5 第85回研究会（研究・交流・出版等の協議と企画）以降、12回の会議を開催。

12・12 第34回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会。以降、6回の研究会を開催。

12・12 親鸞聖人ご命日のつどい「第34回英訳『教行信証』研究会。以降、5回の研究会を開催。

12・19 第23回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

12・19 第18回清沢満之研究会「日本における西洋哲学の受容と清沢満之」京都大学大学院教授・藤田正勝氏（文京区・東京ガールズパレス）以降、3回の研究会を開催。

12・26 親鸞仏教センター報恩講

■2004年

1・9 親鸞聖人ご命日のつどい

1・23 第24回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

1・26 現代と親鸞の研究会⑧「いま、生きる力を問う」大阪大学大学院教授・鷲田清一氏（文京区・東京ガールズパレス）

2・13 親鸞聖人ご命日のつどい

2・23 第25回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

3・1 機関紙『親鸞仏教センター通信』第9号を発行。

現代における人間像に学ぶ研究会 ///

諸富祥彦氏にインタビュー

心理学からみた現代人の苦悩と生きがい

聞き手：藤原正寿（親鸞仏教センター研究員）

「現代における人間像に学ぶ研究会」は、現代の課題に真摯に取り組んでおられる方々に直接インタビューし、「現代の人間像」を学び、社会から要請されている親鸞仏教の課題を探ろうとするものである。その1回目は、2003年10月3日、千葉大学助教授で「時代と闘うカウンセラー」として活躍しておられる諸富祥彦氏を研究室に訪ね、「心理学と現代社会」についてお話をうかがった。ここに、その一部を紹介する。

■ 孤独になる勇気

——先生は、「孤独力」をキーワードにされていますが、いまの時代状況で「孤独」という時間が大切だということの意味は、どういうところにあるのでしょうか。

諸富 これまで思想を深めた方とか、自分なりの生き方を見極めた方というのは、どなたも「孤独」を大事にされてきたのではないのでしょうか。しかし現代社会は、メールやケータイというようなもので絶えず誰かとつながっていないと気がすまないという状況ですね。特に若い人たちはそうです。絶えず誰かと連絡を取り合って、自分の存在意味と存在位置を確認することで、不安を払拭しようとしている感じがします。だから、逆に自分を深めるということが難しくなっているのではないのでしょうか。

例えば、19世紀のデンマークの思想家で、そのことをとても大事にしたのがキルケゴールです。神の前の「単独者」ということを非常に強調しています。そして、神の前の自分を突きつめていくと、どうしても自分では何ともし難い罪の重さにぶつかると。そのどうしてもない罪の重さに、自分がどう関わっていけばいいかを悩み抜いたときに、逆説的に真の宗教性に結ばれるのだと言っていますね。キルケゴールの論理と、親鸞の論理は極めて似ているのではないのでしょうか。罪や煩惱、闇という自分の



諸富 祥彦（もとみ よしひこ） 千葉大学教育学部助教授（2004年4月より明治大学文学部助教授）1963年福岡県生まれ。筑波大学、同大学大学院博士課程修了。教育学博士、臨床心理士、日本トランスパーソナル学会会長。著書に『むなしさ』の心理学、『トランスパーソナル心理学入門』（以上、講談社現代新書）『生きていくことの意味』（PHP新書）『孤独であるためのレッスン』（NHKブックス）ほか多数。

なかのネガティブなものを、なぜそこまで深く突きつめるのかということがあります。ですから、自分ときちんと向き合えるというのは、「単独者」性を大事にするということではないのでしょうか。

だから現代は、まず自分と対話する時間が必要です。宗教的な意味においても、深く個として生きる、個として自分と向き合うことがすごく大事なことに思います。

■ ひきこもりと現代人の苦悩

——いわゆる、ひきこもりということについて、先生は一般的な論調とかなり違うかたちで論じておられるように感じるのですが。

諸富 ひきこもりの問題に関しては、まず誰が誰に語るのかという、その当事者性ということが大きな問題になってきます。つまり、社会現象として論じる場合、私のように心理療法家として論じる場合、あるいは家族として論じる場

合、それからひきこもりの体験者として論じる場合とはまったく違います。この当事者性ということは非常に大きな問題だと思います。

「ひきこもりはよくない」「多くの若者がひきこもってしまって、その結果、日本の生産性が下がる。だからよくない」というふうに言われていますよね。「あいつは、怠けているだけだ」と、そういうふうに言うのは非常に楽な立場です。外野だから言えるような無責任な立場です。こういった風潮がまずあると思います。けれども、ひきこもりの本人たちにしてみれば、怠けているという感じはまったくありません。社会に出たいという気持ちを誰よりも強くもっています。しかし、そのことに対する周囲の共感がない。理解がない。気持ちが及ばないところで、ひきこもっている若者たちを批判しても、これはどうしようもありません。

一方で、ひきこもっている若者たちは、なぜあんなに自分を否定するのかと言えば、世間が自分をどう見ているかを気にして自分を否定するからです。世間の目を内在化してしまうのです。つまり、世間が「ひきこもりはよくない」という眼差しを向けるがゆえに、ひきこもっている若者たちは、さらにその目を内在化して自分を責め、自分を否定する。そのためにさらにひきこもってしまうという悪循環があるのです。もう少し理解し、肯定的な眼差しを向けないと、最後は追い込んでしまうことになります。周囲の人たちは、彼らはすでに十分追い込まれていることをよく知らねばなりません。ですから、治療的な意味で、ひきこもりを責めるのはまずいのです。ひきこもりは責めることによって、逆に病理が重たくなります。

——そこには、現代人の苦悩として「自己肯定感」がもちにくい時代状況があるように思いますが。

諸富 まったくそのとおりです。ただその自己肯定感というときに、非常に浅い意味の自己肯定感と、もう少し深い意味の自己肯定感があって、これは随分違います。浅いほうは、要するに、ポジティブシンキング。自分のよいところ

を見つめようとか、自分に対して肯定的な眼差しを向けようということですが、それが浅い自己肯定です。ポジティブシンキング的なものと、宗教的な文脈の深い自己肯定とは、やはりきちんと分けたほうがいいと思いますね。

浅い自己肯定というときは、前向きに考えられる自分はいい自分で、後ろ向きの自分は悪い自分です。つまり、ポジティブシンキングということのなかで、ポジティブに考えられない自分、ネガティブな自分を否定しているわけでしょう。やはり、これは突きつめるとまだ否定的なところの残っている考え方です。「僕なんかダメ、私なんかダメ」というふうに、自分に対して多くの若者たちは、否定的な眼差しをもっている。こういうような状態から抜け出すことが極めて重要です。では、その言葉がけの内容を肯定的なものに変えたら、それで万事 OK かと言えばそうでもないのです。

例えば、リチャードカールソンの『小さいことにくよくよするな』という本がありました。前向きに生きていこうよ、というわけです。

あの本が爆発的に売れた後に、関連して少し売れた本がありました。『くよくよするな』といわれても』（北西憲二著）という本です。これはよくわかりますね。小さいことでくよくよするな、と言われて、前向きに生きていこうとするけれど、「でも、そう言われてもなあ」という自分も残る。本当の自己肯定とは、そんな自分をも、自分自身の一部として深く受け入れていくことだと思うのです。

※諸富祥彦氏のインタビューは、『現代と親鸞』第5号（2004年6月1日号）に掲載予定です。



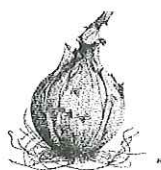
諸富祥彦氏(左)からお話をうかがう(千葉大学研究室で)

● 英訳『教行信証』研究会報告 ●

「問い」をひらく

—『教行信証』「教巻」の引文について—

親鸞仏教センター研究員 櫻井智浩



本紙第6号で報告のとおり、英訳『教行信証』研究会では、2002年7月から毎月2回の読解並びに中間総括の研究会を開催している。また、2003年2月には、「鈴木大拙師の英訳本に学ぶ」、同年11月には「『浄土論註』と二種回向」と題して元大谷大学教授の坂東性純氏を迎え、講義をいただいた。現在、「教巻」を一旦訳了し、引き続き「行巻」の読解を進めている。

今号では、「教巻」までの研究会の成果の一端を紹介し、第1回報告とする。



■ 英訳『教行信証』を読むにあたって

—問題提起としての読み—

英訳『教行信証』の講読を通じて、いかにそれに向き合うべきか、その方向性についても浮き彫りになってきた。

いまでは、宗祖親鸞聖人の真筆である坂東本の影印版、坂東本を底本とした『定本 教行信証』が出版され、宗祖の了解を厳密にうかがおうとするならば、宗祖自身の左訓等を重視して『教行信証』を読むのが通例となっている。

しかし、鈴木大拙師は英訳にあたって、西本願寺蔵版本を底本にし、坂東本を対校に用いた（英訳『教行信証』「編集者序」）とされる。さらには、近代的な宗学が確立する以前から、諸先輩方によって訓読の作法についても仔細な吟味が重ねられてきており、それに対して大拙師も目を配っておられる。したがって、大拙師は『教行信証』を英訳される際、必ずしも坂東本の訓にしたがった読みを英訳したとは限らないのである。



坂東性純氏を迎えての研究会

しかし、英訳から現代語訳することで、大拙師がいかに原典を読み取っているかをうかがい知ることができる。それを再び宗祖の左訓等にしがたった読みと照らし合わせてみると、そこに大拙師の独創的な了解が浮かび上がってくる。それは、確かに宗祖の了解そのものということはできないかもしれないが、そこに留意するならば、大拙師の了解は、われわれが『教行信証』を学ぶにあたって、貴重な問題提起となってくるのである。

大拙師の了解を潜ることで、われわれもそこから再び問い返されてくるように思われる。その端的な例を次に紹介する。

■ 「教巻」の引文

周知のように、「教巻」では宗祖の御自釈の文に次いで、浄土教としての出世本懐（仏がこの世に現れた理由）を説く『大無量寿経』（以下、『大経』）、さらにその異訳である『無量寿如来会』、『平等覚経』が引文されている（当該箇所は、東本願寺発行『真宗聖典』152～154頁、鈴木大拙師英訳書9～11頁）。それらは、いままさに法蔵菩薩の物語が語られ始めようとする、その同じ場面を対象としている。そ

ここでは、これまでにない容貌の輝きを示される釈尊に阿難が問いを發し、それに対して釈尊がその意義を明かし、ほめたたえる。そして、仏がこの世に出現することの得難さを、開花することが稀なウドンバラ華（靈瑞華、優曇華、優曇鉢樹）の喩えを用いて語られる様が描かれるが、その描写は各々異なっている。これら三つの經典の内容が相俟って、浄土教としての出世本懷の事実が語られているのだが、ではこれら各々を宗祖がいかなる観点から引文されているのか、それについて御自釈から直接的にその意図をうかがうことは困難である。

しかし、大拙師はこれら各々に異なった役割を読み取り、それを踏まえて訳出されていると考えられるのである。

■ 各引文の位相

正依の『大經』では、この場面がもっとも詳細に説かれているが、ここでは文字どおり、釈尊と阿難との対話を通じて、釈尊の出世本懷のみを明らかにするものとして語られている。

『無量寿如来会』では、阿難の問いが自分自身によるものかどうかを問う釈尊に、阿難が答える場面から引文されている。一見、『大經』と同じ場面が語られているようであるが、『無量寿如来会』では、「一切如来・^{おう} 應・^{しやうとうがく} 正等覺」のこの世への稀な出現が、阿難の問いの理由とされている。つまり、『大經』では釈尊を指すものと解されていた「如来」に対し、ここでは「諸仏」に意味領域が広がっている。この点を踏まえて、大拙師も All the Tathāgatas「あらゆる如来方」と意識されている。

『平等覺經』では、仏の出現が稀なことを説いたうえで、問いの内容を普く明らかに聞くように勧められている。ここで注意されるのは、「も（若）しわすれずは、仏辺にありて仏に^{つか} 侍えたてまつるなり。もし今問えるところ、普く聴き、諦らかに聴け」という箇所である。

it is not an inconsequential matter that you are near the Buddha and attending on him. Listen well and attentively concerning what

you have now asked him.

「君が仏に近づき、付き従うことは、理になっ
ている。君が彼に尋ねたことを、よく、注
意深く聞け」と、これを訳されている。そこ
では、歴史的実在者としての釈尊に語らせるか
ちで、あたかも教法を内実とする普遍的存在
として、「仏」が三人称で語られている。この英訳
から、宗祖が「若し」と訓じているところを、大
拙師は「なんじ」と読んでいることがわかるが、
これによって阿難の問いを通じて、われわれの問
いがひらかれる地平が表現されているのである。

以上の『大經』『無量寿如来会』『平等覺經』
の引文について、『大經』は釈尊の出世本懷、
『無量寿如来会』は諸仏の出世本懷、『平等覺
經』は釈尊に語らせながら、仏のはたらきとし
て仏の出世本懷の意義がわれわれの問いとし
てひらかれたことが説かれているというように、
大拙師はそれぞれ異なる役割を踏まえて訳出
されている。

■ 出世本懷の意義

— われわれにひらかれた問い —

出世本懷とは、単に仏がこの世に現れた事実
というだけの意味ではないことが、以上から明
らかであろう。そこには、歴史的実在としての
釈尊と諸仏、そして問答を通じての仏と衆生と
の呼応する関係が暗示されている。

この点について、坂東性純氏は「仏がこの世
に現れたということは、それを受け取る人の心
境と無関係ではない。受け取る人に回心がない
と、仏があるかどうかということは論外であ
り、『仏まします』とは、受け取る人の心境を
離れて言えない。釈尊の出世も、一人ひとりの
回心と同時に出世ということがはじめて問題に
なるのであり、そこでは教と仏の存在が同時に
問われる（取意）」と指摘された。

ここでは、あらためて「仏とは何か」という
ことが問われているのである。大拙師の英訳
は、この点を鋭くついている。

※坂東性純氏の講義は、『現代と親鸞』第7号（2004
年12月1日号）に掲載予定です。

第1回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催（2003年10月17日）

親鸞仏教センターでは、設立以来、毎月1回、東京国際フォーラム（有楽町）を会場に、連続講座「親鸞思想の解明」を開いているが、第21回の講座では、これまでの講座の課題（浄土一濁世を超えて、濁世に立つ）から、テーマに「科学技術文明と現代の不安」を掲げ、基調講演に國府田隆夫氏（物理学者・東京大学名誉教授）を、パネリストに下田正弘氏（仏教学者・東京大学大学院助教授）を迎え、本多弘之所長を交えて、第1回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催した。当日は、有識者やサラリーマンなど約100名の参加者と共に、3時間半にわたって熱心に討議がなされた。

基調講演では、國府田氏（＝写真上）から、まず「20世紀は物理学の時代だったとも言われるように、物理学とその技術化が、非常に影響力をもちながら時代を動かしてきた。一方で、おそらく例外なく物理学者が心を痛めたのは、核兵器の開発であった。物理学が及ぼした社会的責任からいえば、研究に関わる技術をもつということは、『科学技術文明と現代の不安』という大きな課題をもつことであり、物理学に限らず、科学が私たちにどういう問題を提起しているのか、真摯に耳を傾ける必要がある」と述べられ、氏の物理学を基礎にされた研究から、約140億年前（ビッグバン）から現代までを、宇宙・地球・生命の歴史として話された。さらに生命の進化論にもふれ、「人の特徴は『死ぬ』ということ意識している」ことにある。しかしなお、永遠の生を求めないではいけない。そういう意識で人類が進化してくると同時に、『宗教』と『科学（生存のための知識）』が出現してきたのではないかと指摘された。また、現代の不安について、「遺伝子支配レベルでの種と人の心、さらに、心が科学の対象になり得るのか」という問題を通して、科学と宗教の接点が生まれてくるのではないかと等、意義深い問題提起をいただいた。

続いて、パネリストの下田氏（＝写真中）からは、基調講演を受けて、「科学は『知る』』ということによって宇宙を解明し、素粒子を解明し、それを自己にまで結びつけていこうとしたときに、覆い尽くせないもの（自己の生命）を覆い尽くそうとする矛盾に立ち至ることになる。しかし、そこで初めて宗教との対話が生まれてくるのではないかと。だから、心を科学の対象にするという問いが起きてくること自体に意味があり、宗教はここをどう受け止めているのかという問いでもある。そういう意味で、宗教に科学は不可欠だと思う」と述べ、現代科学の発展していく世界と、「知」の世界が壊れて現れてくる世界、この両者が存在していることの事実を立て、「所有していく世界と、所有する知では解決し得ない世界、この二つを受け止めていくことが、科学と宗教の壁を超えていける道ではないか」と語られた。

最後に、本多所長は、「現代の不安とは、死に対する恐怖というような、いつの時代であっても感じられる恐怖とは異なって、非常に不安定な状況の中でいつも自己を保持していかなければならないということがあり、そのことを意識する存在であるがゆえの不安である。つまり、『知』の作業の積み重ねの結果、対象の中に自己が解消してしまうという、対象を見ている心が心自身を喪失してしまって、自分を取り戻すという課題が見えないということが現代の不安ではないか。しかも現代は、『生命の共同体の連鎖』が、物質界によって食い込まれ、非常に希薄になっている。だから自らの生命の背景も未来も感じられず、自己を孤立化するという傾向性を強めているのではないかと述べ、『教えに学ぶ（聞法）』とは、その道理を、理性を潜って学び取りながら、単に理性の対象界を知るのではなくて、生きている現実の身が教えの言葉を事実として感じ取るということである」と語った。

引き続き開催されたパネルディスカッション（＝写真下）では、休憩中に寄せられた聴講者からの質問や助言者からのコメントをもとに、緊張感のある議論の場が展開され、「科学」「技術」「現代」「不安」の関係をめぐって意見交換がなされた。科学技術文明と現代の不安を生きるなかで、科学と宗教の対話がどこで成り立つのか、また、いま宗教に求められていることは何かなど、これからの「現代の課題」と「親鸞思想」との接点を明らかにしつつ、課題を共有する取り組みが願われている。



あ と が き

『盲導犬クイールの一生』（写真：秋元良平、文：石黒謙吾 文芸春秋）が映画化され、3月から全国で上映される。監督は、親鸞仏教センターの情報誌『アンジャリ』（創刊号）にも執筆いただいた崔洋一さんである。娘から借りたこの本をあらためて読んだ。7歳（人間なら44歳）で盲導犬としての役割を離れたクイール（ラブラドル・レトリバー）の誕生から息をひきとるまでを、愛らしい写真と愛情あふれる言葉で綴られた静かな感動の記録である。ご一読をおすすめしたい▼「『おいで』と呼びかける。それにこたえてすぐにパッとくる子は盲導犬には向いていない。はしゃぎ過ぎない子、考えてからくる子、人の声や物音に感ぜられず、落ちついて『何？』と、声をかけた人の目を見るような子が盲導犬には向いている」のだそうだ。特にパートナーとの共同訓練は、お互いを理解し、信頼感を育む大切な時間である。盲導犬の訓練の目標とする成果は、「Go（進め）！」と指示されても「行かない」ことだそうだ。「ただ言われたとおりに動いてい

たのでは、自動車の通る危険な道でも進んでしまう。そうならないために、自分で考えて行動する（利口な不服従）を覚えさせねばならないことだ」という。深い信頼関係の誕生である▼翻って人も、生きるということにおいて最も基本的な、「他との関係」を学ぶべき時期に学ばずに通り返してしまおうと、コミュニケーションがうまくとれなくなる。精神科医の木村敏氏は、現代人の自己の病理について、「自己とはいわば、周囲の他人たちとの関係の中にある自分と、そこに吸収されてしまわない独自の世界との、緊張をはらんだ二重の構造をもったものでなければならない」「現代の人間は、相手抜きで、ただ自分一人だけで自己であろうとしているのではないか」（『アンジャリ』第6号）と指摘する。人間は、自分だけで生きていけるものではない。励まされ、支えられ、育まれて生きていくのであろう。そんなことを、あらためてクイールの一生が教えてくれているように思う。（長谷岡）